

ふるさとを誇れる教育

宮崎県教育庁北部教育事務所

教育推進課 指導主事 福島 由太郎

ふるさとに思いを巡らすとき、以前赴任した学校のことをよく思い出します。その学び舎は、豊かな自然が溢れる里山に、年長児から9年生まで10年間の一貫した学びの場として開校しました。開校時に赴任した私は、7年生の学級担任として勤務し、小学校と中学校の一貫した教育を、どのように実践すべきかを考え、同僚の先生方と系統性について協議し、試行錯誤しながら取り組んだことを覚えています。当時は、4年生までの前期、5年生から7年生までの中期、8年生と9年生の後期という3つのブロックがあり、ブロック長を中心に子どもたちの実態に応じた目標を設定して、小学校と中学校のそれぞれのよさを共有しながら様々な活動に取り組んでいました。特に中期ブロックは、小学校5・6年生と中学校1年生の子どもたちが在籍しており、総合的な学習の時間や児童生徒会活動等を中心に互いに知恵を出し合いました。中期ブロックの最高学年である7年生は、ブロック集会の運営にも携わり、リーダー性を発揮して活躍の場を広げることができていました。

この学校で、特に印象に残っていることは、全校園児、児童、生徒で一緒になって取り組んだファミリー班活動です。子どもたちを異学年集団の縦割りファミリー班に分けて、様々な活動をより一層充実したものにするために、チームで取り組みました。清掃活動や学校行事を通して、上学年の児童生徒は下学年の子どもたちに思いやりをもって接し、下学年の園児・児童は、上学年の子どもたちの活躍する姿を見て、少し先の自分の姿を自然にイメージすることができていました。あたたかみのあるファミリー班は、学級とはまた違う所属感があり、共感的な人間関係の育成や自己存在感の感受に繋がる貴重な場となりました。そこには、子どもたちの10年間の繋がりを意識した学びがあったように思います。

また、子どもたちの活躍の場は学校内にとどまることなく、地域ごとの祭りや行事の担い手としても立派に伝統を受け継ぎ、広がっていました。地域の方々と一緒になって作り上げる体験を通して、人々の考えを直に聞く機会や、期待に応えて表現する場があり、よりよい生き方について学び考える貴重な場となったことで、ふるさとを大切に思う心が育まれていたと思います。私たち職員も、基幹産業である林業や肥育農家の方をお願いして、地域の実態を学ばせていただきました。見るだけではなく、実際に全職員で肥育農家の方の作業を体験したり、生産者の方の思いを聞いたり、大型の重機で木を切る体験を通して、地域や自然を守り育てていくことの大切さを実感できたことは、地域に根ざした教育を実践する上で、大変意義深かったです。

今年、およそ10年ぶりに学校訪問で、その学び舎を訪れる機会をいただきました。当時と変わらず校内は子どもたちの元気のよい挨拶で満ちていました。そして、自発的に行われる朝の落ち葉掃きのボランティア活動も継続されており、大変懐かしく感じました。自分たちの学び舎を自分たちの手で美しく、環境を整えていくことはふるさとを誇りに思い大切に作る基盤となる活動だと思います。開校当時ゴム手袋をはめ、トイレの便器を雑巾で丁寧に磨いていた子どもたちのやり遂げたあとの充実感に満ちた、どこか得意げな表情が思い出されました。自分の役割に責任を持ち、自分たちの学校に、そして自分たちのふるさとに誇りをもつ気持ちが受け継がれていると実感させられた瞬間でした。

へき地校や小規模校では、小人数集団による学習がゆえに、限られた人間関係によるコミュニケーション力の不足や社会体験の不足などが課題として挙げられることがあります。そうした中でも、この学び舎を巣立った子どもたちは、自分の信念を貫き、自分の行動に自信をもって、よりよい生き方を模索することができると思います。それは、例え地元を離れても、心のよりどころとなるふるさとを大切にしているからです。へき地校や小規模校で子どもたちに日々寄り添いながら、教育はもとより様々な活動に励んでおられる先生方、そして、子どもたちに温かい眼差しを向けてくださっている地域の方々に感謝の気持ちをお伝えしつつ、ふるさとを誇りに思う教育と今後の更なる活躍を祈っております。